

あけがた

宮沢賢治

青空文庫

おれはその時その青黒く淀んだ室の中の堅い灰色の自分の席にそわそわ立ったり座ったりしてゐた。

二人の男がその室の中に居た。一人はたしかに獣医の有本でも一人はさまざまのやつらのもやもやした区分キメラであつた。

おれはどこかへ出て行かうと考へてゐるらしかつた。飛ぶんだぞ霧の中をきいつとふつとんでやるんだなどと頭の奥で叫んでゐた。ところがその二人がしきりに着物のはなしをした。

おれはひどくむしやくしやした。そして卓をガタガタゆすつてゐた。

いきなり霧積が入つて来た。霧積は変に白くぴかぴかする金欄の羽織を着てゐた。そしてひどく嬉しさうに見えた。今朝は支那版画展覧会があつて自分はその幹事になつてゐるからそつちへ行くんだと云つてかなり大声で笑つた。おれはそれがしやくにさわつた。第一霧積は今日はおれと北の方の野原へ出かける約束だつたのだ、それを白つぽい金欄の羽織などを着込んでわけもわからない処へ行つてけらけら笑つたりしやうといふのはあんまり失敬だと おれは考へた。

ところが霧積はどう云ふわけか急におれの着物を笑ひ出した。有本も笑った。区分キメラもつめたくあざ笑った。なんだ着物のことなどか きさまらは男だらう それに本気で着ものことを云ふのか、などとおれはそつと考へて見たがどうも氣持が悪かった。それから今度は有本が何かもにやもにや云つておれを慰めるやうにした。

おれにはどういふわけで自分に着物が斯う足りないのかどう考へても判らなくてひどく悲しかった。そこでおれは立ちあがつて云「つ」た。

「あたりまへさ。おれなんぞまだ着物など三つも四つもためられる訳はないんだ。おれはこれで沢山だ。」有本や霧積は何か眩しく光る絵巻か角帯らしいものをひろげて引っぱってしゃべつてゐた。おれはぶいと外へ出た。そしていきなり川ばたの白い四角な家に入った。知らない赤い女が髪もよく削らずに立つてゐた。そしていきなり

「お履物はこちらへまはしましたから。」と云つておれの革スリッパを変な裏口のやうな土間に投げ出した。おれは「ふん」と云ひながらそつちへ行つた。それでも気分はよかつた。

片っ方のスリッパが裏返しになつてゐた。その女が手を延ばして直す風をした。おれはこんな赤いすれっからしが本統にそれを直すかどうかと考へながら黙つてそれを見てゐた。

女は本統にスリツパを直した。おれは外へ出た。

川が烈しく鳴つてゐる。一月十五日の村の踊りの太鼓が向岸から強くひびいて来る。強い透明な太鼓の音だ。

川はあんまり冷たく物凄かった。おれは少し上流にのぼって行った。その所で川はまるで白と水色とぼろぼろになつて崩れ落ちてゐた。そして殊更空の光が白く冷たかった。

(おれは全体川をきらひだ。) おれはかなり高い声で云つた。

ひどい洪水の後らしかつた。もう水は澄んでゐた。それでも非常な水勢なのだ。波と波とが激しく拍つて青くきらきらした。

支流が北から落ちてゐた。おれはだまつてその岸について溯つた。

空がツンツンと光つてゐる。水はごうごうと鳴つてゐた。おれはかなしかつた。それから口笛を吹いた。口笛は向ふの方に行つてだんだん広く大きくなつてしまひには手もつけられないやうにひろがつた。

そして向ふに大きな島が見えた。それはいつかの洪水でできてからもう余程の年を経たらしく高さも百尺はあつた。栗や雑木が一杯にしげつてゐた。

おれはそつちへ行かうと思つた。

そしていつかもう島の上に立つてゐた。どうして川を渡つたらう、私は考へながらさびしくふり返つた。

たしかにそれは水が切れて小さなびちやびちの瀬になつてゐたのだ。

おれは青白く光る空を見た。洪水がいつまた黒い壁のやうになつて襲つて来るかわからないと考へた。小さな子供のいきなりながされる模様を想像した。それから西の山脈を見た。それは碧くなめらかに光つてゐた。あんな明るいところで今雨の降つてゐるわけはない、おれは考へた。

そらにひろがる高い雑木の梢を見た、あすこまで昇ればまづ大低の洪水なら大丈夫だ、そのうちにきつと弟が助けに来る、けれどもどうして助けるのかなとおれは考へた。

いつか島が又もとの岸とくつついてゐた。その手前はうらかな孔雀石の馬蹄形の淵になつてゐた。おれは立ちどまつた。そして又口笛を吹いた。そして雑木の幹に白いきのこを見た。まっしろなさるのこしかけを見た。

それから志木、大高と彫られた白い二列の文字を見た。

瘠せてオーバアコートを着てわらじを穿いた男が青光りのさるとりいばらの中にまっすぐに立つてゐた。

「私は志木です。こゝの測量に着手したのは私であります。」帽子をとっていやに堅苦し
くその男が云った。志木、志木とはてな、どこかで聞いたぞとおれは思った。

青空文庫情報

底本：「【新】校本宮澤賢治全集 第十二巻 童話5【#【5】はローマ数字、1-13-25】

・劇・その他 本文篇「筑摩書房

1995（平成7）年11月25日初版第1刷発行

※底本の本文は、草稿による。

※本文中「□」で括られた部分は、底本の編者により校訂された箇所である。

（例）云「つ」た。

入力：砂場清隆

校正：noriko saito

2008年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あけがた

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>